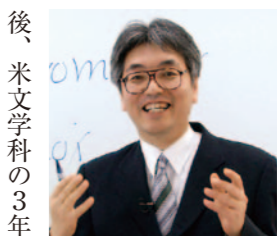


## 「なにくそ！負けるものか！」

英語塾講師 竹岡広信



たけおか・ひろのぶ  
1961年京都府に生まれる。京都大学卒業後、駿台予備学校の塾講師および洛南高等学校の非常勤講師を務める。現在は竹岡塾を主宰し、「英作文の鬼」との異名を持つ。

後、米文学科の3年生に編入したわけだ。

### ■はじめに

高校時代は数学が大好きでした。愛読書は東京出版の『大学への数学』。電車の中、風呂の中で、歩いている途中、気がついたら数学の問題を解いている、という程でした。

逆に、英語は「嫌い」でした。「pick up」を辞書で引いたら17もの意味が出ていて卒倒しそうになりました。「Be to (V)」には「義務、予定、運命、可能、意図の意味がある」と言われたときには、全く理解できず、「stand = bear = put up with 耐える」と書いてあると、「どう使い分けるの？」などと、疑問だらけでした。

そんな思いを持っていたのでは英語が好きになれるわけありませんね。そして教育実習も数学でした。別に数学の教員をめざしていたわけではありませんでした。むしろ、数学が大好きだったので、苦手な人の気持ちが変わりません。

そのような中、「英語が苦手」という意識は、現在英語の教員になつている私の大きな動機となつていきます。ここに至る経緯の中で、特に印象に残っている言葉を挙げたいと思います。

### ■「ご期待に添えなくてすみません」

大学に入学してすぐに塾で講師として教え始めました。英語は苦手だったので、なぜか

英語を教えることになってしまいました。「大学に入ったから俺でも教えられる」という奢りがあったのだと思います。もちろん、今以上に熱心に教えていたのは事実です。教材研究も相手ががんばりました。ところが3年間教えたおおよそ20名の生徒のうち、第1志望に合格したのは0名。さすがに落ち込みました。

「なぜだ？」と考える日々が続く、出た結論が「教師の出来が悪ければ生徒は伸びない」という単純なものでした。自分のような「ある程度英語を知っている」というレベルで教えてはいけなかったのです。今でも覚えているのが、「expose」という単語。今では「こんな単語知らなければお話にならない」と言い切ることができませんが、当時の僕は「これは少し難しい単語だね」なんて言っていました。そのようなレベルの低い指導では伸びないのは当然でしょう。

そんなとき、真面目な生徒がお礼を持ってやってきました。そして「先生、あんなに熱心に教えていただいたのに、ご期待に添えなくてすみません」と言ってくれました。

涙が出ました。「こちらこそゴメンな」と言いたかったのですが、言葉になりません。文学部に行つて、一から英語の勉強をしようとおそうと決意しました。そして昭和59年、工学部を卒業

常勤講師として引き受けました。これまで塾を続けてきたのは、同じ生徒を3年間きちんと育てたいという思いと、自分の理想の授業を追い続けたいという考えがあったからです。

### ■「誰が教えた？」

高校の非常勤講師として、高校2年生の2クラスを担当することになりました。その高校は学力別のクラス編成をしていて、入学時にクラスが分かれます。僕が担当したのは「下の」クラスでした。私は新人でしたが、既に英語を10年ぐらい教えており、京都大学の文学部を卒業したこともあって、自信满满で臨みました。そんな中、授業が始まりましたがその状況は惨憺たるもの。生徒の予習は不十分、授業の進行が尋常なく遅れる、小テスト、定期考査の結果は伸びない。さすがに焦りました。「こんなアホな連中を教えるのは嫌だ」とまで思うようになりました。

1学期が終わり、通知簿をつけることになりました。「よし、通知簿で仕返ししてやれ！」と思い、90数名のうち最低評価の「1」を70名ほど、「2」を10数名つけることにしました。元担任の宗教の先生に「先生、こいつら我慢できません。通知簿で1を70名つけてもいいですか？」と怒られることを承知で尋ねました。そうしたら意外な答えが返ってきました。「お前は、この1学期間よく頑張った。予想以上の頑張りだった。だから思うように通知簿をつけられよいい」僕は嬉しい気持ちで「有り難うござい

ます」と言つて、その場を去ろうとしました。

すると、「竹岡、誰が教えた？」と先生が呟いたのです。「そんな大勢の生徒の通知簿が1になるといふことは、お前が1だろ」と。

ショックでした。昔、多くの塾生を不合格に導き、そのことを悔い文学部に移った。そのはずなのに、気がつけば傲慢な教員に成り下がっていました。きっと、顔には「俺は京都大学出身や。お前らとは出来が違うわ。所詮、お前らには俺の授業なんかわからへんのや」と書いてあったのでしよう。

通知簿をほとんど5に変えました。そして、高校まで10分で通える所に引越しました。2年目も持ち上がることになり、「高校3年生を持つ」ということで、予備校も休職することにしました。そのクラスの子どもの英語の平均点が、3年生の秋の全国模試では「上の」クラスを上まわりました。嬉しかったですね。

あのとき、70名の生徒の通知簿に1をつけていたら、今頃はどんな教員になっているでしょうか？おそらく、いつも「生徒の出来が悪いから」と文句ばかり言う、「しょうもない」教員になっていったと思います。先生の言葉には本当に感謝しています。

### ■「Triumph はなぜ「勝利」ですか？」

文学部でラテン語を学んだおかげで、ある程度語源に対する基礎知識もありました。「英単語」＝「丸暗記」という風潮に我慢ならず、語源を駆使した授業を展開していました。けれど

### ■「お前は要らん」

紆余曲折を経て文学部を卒業しました。5年もの間英語の勉強に打ち込んだため、以前の僕とは全く違う人間になっていました。古英語、ラテン語を学び、詩を読み込み、英語学の文献を読み漁り、英字新聞を読み、サッチャー元首相の演説をテープで聞かえたまま丸暗記するなど、ありとあらゆる努力をしました。そして、卒業間際に、高校の現場で英語の教員になろうと決心し、意気揚々と出身高校へ出かけて行きました。

高校の3年間ずっと担任をしていた宗教の先生に「僕を採用して下さい」と言いました。そうしたら、先生はひと言「お前は要らん」。さらに「数学でなら採用を考えてもよい」とまで言われました。そのときには恨みに思いましたが、考えてみたら当然のことです。高校のときに英語が優秀だったわけでもなく、教育実習は数学、そんな人間を英語で採用するわけはありません。それで現在の駿台予備学校でお世話になることになりました。

駿台でお世話になることが決まった後、「じゃあ採用してやる」と言われましたが、非

も今振り返れば、「ある程度語源をかじっている段階」にすぎなかったのです。語源のわからない単語も多くあり、そんな場合には「これは丸暗記して下さい」と逃げていました。

ある生徒が「triumphは何故triが『3』をあらわすのに『勝利』という意味になるのですか？」と質問にきました。まさに「痛いところを突く」質問でした。ごまかすと人間関係が崩れてしまいます。それは絶対に避けなければなりません。そこで「今はよくわからないけど、一か月待ってね」とお願いしました。

それから語源の本を数多く買い、徹底的に勉強してみました。すると、「phone 音」「emphasize (em- phoneの動詞化) 音をだす→強調する」から triumphは「(tri-) 3 + umph (= emph) 音を出す」だから「音を3回出す」までがわかりました。ところが「3回音を出す」の意味がさっぱりわかりませんでした。何日か経ち、ある本を読んでいるときに、英語では応援のときに「Hip, Hip, Hurray」と言つて知つたわけです。「そうか！万歳三唱と同じか！」とわかり、ようやく疑問が解けました。意気揚々とその生徒に答えました。その生徒は、後に京都大学の入試実戦模試の英語で全国1位になりました。

その生徒の学力も伸びましたが、私の学力も随分と伸びたと思います。「ピンチがチャンス」と昔から言われていますが、「自分が窮した所」が今では「自分の強み」になっていきます。これからも「ピンチ」を楽しもうと思つていきます。